

みなさんは、何を軽米らしさにあげますか？

昔きゅうり、店頭 の炭火で魚を焼く風景、今はないあの街角の建物・・・などなど

「30年の桜」

連日の寒さの中にも春の気配が感じられるようになってきたある日、「ちょっと来てみてよ、おもしろいものが出てきたよ」と街の駅、湯川さんからの電話が入りました。

それは昭和45年の住宅地図。奇しくも僕の生まれた年の軽米町の様子が描かれていたのです。

「ああ、病院がここにある。あれ？みちのく銀行が弘前銀行だ」あの坂道を登って、毎日祖母を見舞ったものです。

「ここにこの人が住んでいたんだ・・・この人がこっち？へえ・・・」見知った人の名が多いのがこの年代の地図の楽しいところ。

「そういえば・・・あ、あった！映画館、ふうん、高栄館って言ったんだ、小さい頃映画見たの覚えてますよ」

子供の頃はすごく大きい建物だった気がしたのですが、思いのほか小さかったのが意外です。

それにしても商店が多いのです。

かつて日常の買い物は、大町・新町・仲町と、そのそれぞれの町内で充分こと足りたのかもしれませんがね。今よりも6千人くらい人口が多かったとも

いうこともその商店を成り立たせていた理由のひとつかもしれません。お店が人々の生活に近いということは、お店を中心として、近隣の人たちの会話やこころの行き来が密だったといえるでしょう。

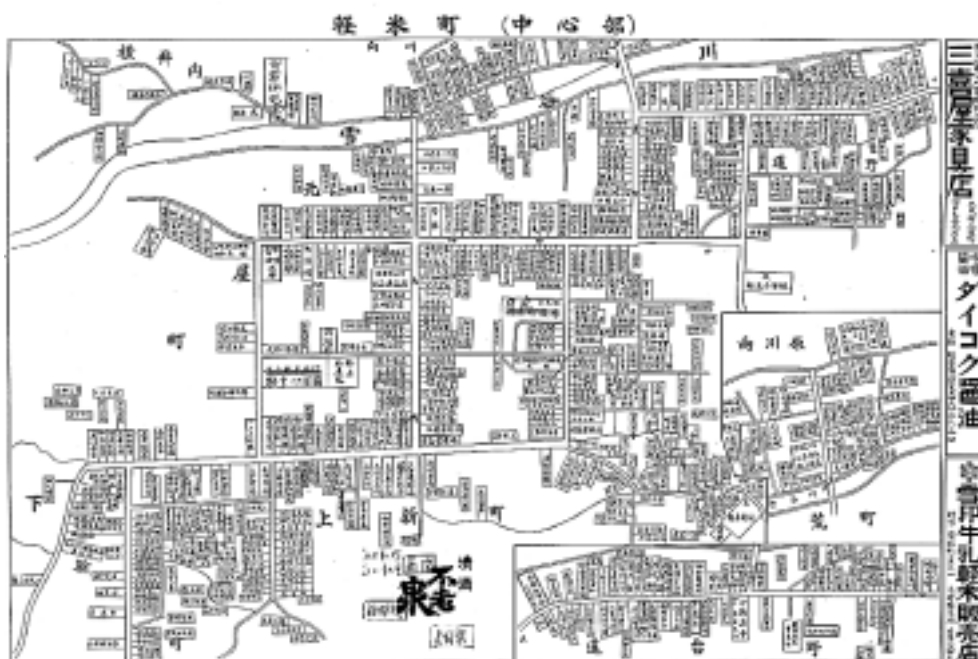
今は買い物といえば1ヶ所で何でも揃いますし、気軽に車でどこまでも買いに行けます。しぜん、近隣との会話も行き来も希薄になって至極当然の理です。

この地図に記されている商店たちは、30年の時の流れのうちに、ひとつ、また一つと町の明かりが静かに消えていったのです。

昨年生まれた僕の息子が30歳になる頃、果たして軽米町はどんな姿になっているのでしょうか。このままだったら...。ふと、風雪に倒伏し、その半身を雪に埋もれさせた一本の名もない木が、その地図上に浮かびました。

願わくば軽米の30年後が、満開の桜の木のようにであるように。誰彼となく笑顔の集まる、しっかりと太い根で大地をつかみ、天をあおぐ枝先にたっぶり花をつけた桜木のようにであるように。

(団員K)



住宅地図(昭和45年東京交通社発行)の一部です。(軽米タクシー(株)提供)
これ以前の地図をお持ちの方は街の駅までご連絡ください。

『軽米らしさ探偵団』とは？
一九九九年十月の豪雨災害後の河川工事の会議で、軽米らしさは何かと聞かれて即答できなかったことがきっかけとなり、軽米らしさを見つけ、地域資源を活かした魅力あるまちづくりを進めようと設立されたグループです。